

埼玉育ちのグローバル人

タイに行きたい！タイを知りたい！

第3回 「タイの学校教育について」

JICA 海外協力隊 2018 年度 2 次隊

伊井 誠 さん



今回が3回目ということで、僕はJICA協力隊でタイの中高一貫校に配属されていましたので、タイの学校を中心にタイの教育やそこの生活について書いていこうかと思います。タイの義務教育は初等教育6年と中等教育前期(中学)が3年の9年間になっていて、日本と同じシステムになっています。ちなみに、僕が活動で主に携わったのが、後期の中等教育(高校)の学生達で、中等教育では二学期制(5月~9月が前期、10月~2月が後期)により、学校が運営されています。

また、タイの学校は日本と同様に女子高、男子高、共学の学校があり、学生が学校の中で生活するタイプの全寮制の学校と、家から通学するタイプの学校に別れます。僕が配属された学校は全寮制の理系に特化したカリキュラムのサイエンスハイスクールで、周辺の県の中でも非常に優秀な学生が集まるような学校でした。学校の場所も、街の中心部から車で15分くらい離れたような周りが田んぼしかないような場所で、生徒だけでなく、教員も平日は学校の教員寮、教員宅で生活して週末だけ自宅に帰るという方も多くいました。かく言う僕も、活動期間のほとんどは配属先の学校の中の教員宅で生活していました。コロナ前の時期だと、生徒は2週間に一度は土日実家に帰省することになっていましたが、コロナが流行して、その中で学校での授業が再開した時期では、生徒は2

か月に一度の帰省となっていました。



配属先の学校と周辺の雰囲気

食事については、学校に食堂があり、そこにそれぞれの種類のタイ料理のお店が出されていて、一食30パーツ~40パーツ(100~150円くらい)で十分な量のご飯を食べることができます。他の隊員に話を聞いた所、給食制の学校もあるようでしたが、僕の学校は自分で毎回好きな料理をお金を出して買って食べるという方式でした。そのため、生徒は食費が必要になるわけですが、僕の学校の学生は全員、教育省から学費+食費の奨学金が給付されていたため、経済的な面では全く問題なく、本当に学生が朝から晩まで学業に集中できる環境が整えられていました。(それ故、入試の倍率は10倍以上です。)当然ですが、この環境はかなり特別な環境で、他の一般的なタイの田舎の学校だと、生徒の学費や食費については家計で負担しなけ

ればならないため、平均的なタイ人の所得の家庭だと子供2人以上が学校に通う状況となるとかなり家計的に厳しい状況になります。そのため、ほぼ毎日子供も学校以外の時間はお金を稼ぐためにバイトをせざるを得なかったり、あるいは、都会で働いているような収入のある親戚に援助してもらったりなど逼迫した経済状況と隣り合わせで学校に通っているという子供たちがまだまだタイには数多くいるというのも事実です。こういう話をタイ人から直接聞いたりすると、学業と経済は切っては切れない関係であることや日本という経済的に恵まれた国に生まれて、学校に通っていた事がなんと幸運なことかと改めて思い知らされたりします。



コロナ下の学校の食堂の様子

さて、タイの学校の話へと戻すと、タイでは地方ごとにさまざまな方言がありますが、いくら地方の方言を使う地域にある学校でも、教員は授業で必ず標準語を用いて授業を行います。タイの地方の役場に配属された協力隊員などは、今まで勉強してきたタイ語とは大きく違うような、地方のタイ人が使う方言に苦しめられるのですが、前述の理由のほか、学校の教員は大体が院卒で英語をある程度理解できる方も多いので(普通に話せる方もいます)、僕や他の学校に配属されている協力隊員はこの「方言わからない」問題に直面することはそこまで多くないです。(ただ、聞くところによると、先生同

士の普段の日常会話だと方言が使われて、その流れで方言が飛んでくるから理解できずに困ることもあるとか。(笑))



ICTの授業での一コマ

また、タイの学校では一年を通じて、様々な行事があります。日本にあるような運動会や文化祭的な催しなども同様にあり、いずれのイベントも生徒が主体的に動いて大半の準備、運営を行います。日本になくてかつ、タイの学校でかなり重要度の高い行事の一つにワイクルーセレモニー(生徒が教員に敬意を示す行事)があります。普段のタイ人の学生の教員に対する敬意は日本の学生のそれと比べると遥かにはっきりとしています。このワイクルーのイベントでは、教師という知識を持っており、それを教えてくれる人に対して、改めて敬意を表すために定められているイベントで、生徒は手作りの花輪を教師に送ったりして敬意を表します。

最後に、僕が出前講座やタイをあまり知らない学生達にタイについてプレゼンテーションする時によく言うことは、僕が見てきたタイの教育は非常に質が高く、ICT教育についても、日本の一般の高等学校と比較すると先に進んでいてかつ、英語を話せる学生も沢山いて、先進国以外の国でも優秀な人材は大勢います。なので、この事実を知って、将来に向けて備えておいた方が良いでしょうということです。僕自

身が派遣される前になんとか持っていたタイのイメージだと、ちゃんとした教育を受けていなくて、こちらから様々な知識を教えてあげる必要があるのかと思っていましたが、実際にボランティアとしてタイに行ってタイ語を使って、タイ人とともに生活をして、同じ目線で働き、彼らの事を知るにつれて、最初に持っていた考えと大きく異なっていることに気づかされ、改めて彼らから学ぶことや、自分自身の習慣や考えを省みるきっかけになったりもしました。このように自分自身の視野を広げる経験ができたことは協力隊に参加して得た収穫の一つでもあります。

それでは、エッセイは今回で最後というところで、皆さんがこれをきっかけに少しでもタイという国に興味を持って、実際に「来タイ」される事を心よりお待ちしております！ ここまでお読みいただきありがとうございました！
ขอบคุณครับ (※タイ語の「ありがとう」)



講義後同僚と